

自閉症幼児とのかかわりにおける保育者の 心理的負担メカニズムに関する一考察 ～療育実践における保育者の「やりづらさ」に注目して～

白梅学園大学子ども学部 西村 章次・狗巻 修司

研究の目的

自閉症幼児は共同注意行動や模倣行動などコミュニケーションスキルに重篤な障害特性がみられることが指摘されてきた。これまでの研究ではコミュニケーションスキルを単独個別的にとりあげてその障害特性について検討されてきたが、日常の文脈の中でみられる自閉症幼児の障害特性はこれら個別の障害特性が「総体」として出現したものである。そこで本研究では自閉症幼児のコミュニケーションスキルを個別にとりだすのではなく、他者との相互交渉における障害特性について検討することを目的とした。

本研究の方法

対 象：2名の自閉症幼児（ともに男児）

H 児：5歳5ヶ月～5歳10ヶ月

K 児：4歳7ヶ月～5歳0ヶ月

方 法：週1回の保育参加による観察研究

観察期間：2010.7.～2010.12.

分析の方法

分析場面：朝の自由遊び場面と設定保育場面における保育者との相互交渉場面

分析方法：) 分析場면을記録したビデオ映像の中間点から前後90秒ずつ計3分間を切り出し、評定データを作成する。

) 「評定データ」について対象児と保育者とそれぞれの行動をトランスクリプト化し、いかに掲げる項目に従ってコーディングを行う。

評定項目

) 保育者のはたらきかけ

維持：対象児が行っている遊びに寄り添い、その遊びを継続させるようにはたらきかける。

発展：対象児が行っている遊びに寄り添い、新しく遊び方を提示するなど遊びを発展させるようにはたらきかける。

転換：対象児が行っている遊びとは無関係な遊び道具を提示するなど興味を転換させるようにはたらきかける。

制止：対象児の動きを規制するなどその行動に一定の規制をあたえるようにはたらきかける。

) 対象児の応答

応答なし：保育者からのはたらきかけに反応を示さない。

意図の理解が不十分な応答：保育者のはたらきかけの意図とはずれた反応を示す。

意図理解あり・共有なし：保育者からのはたらきかけに適切に反応を示すが視線を合わせる・笑いかけるなど共有行動がみられない。

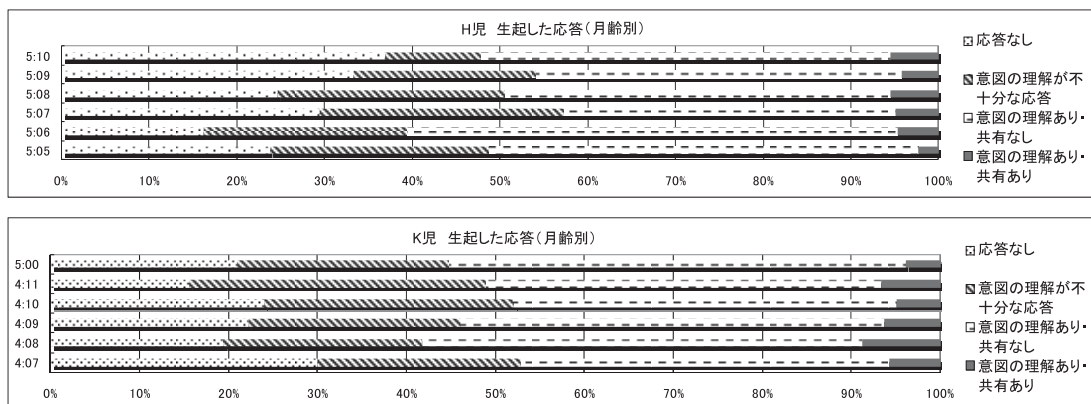
意図理解あり・共有あり：保育者からのはたらきかけに適切に反応を示し、かつ視線を合わせる・笑いかけるなど共有行動がみられる。

⑤結果

i) 対象児の応答の縦断的变化

各月齢によって対象児の応答に変化が生じたか

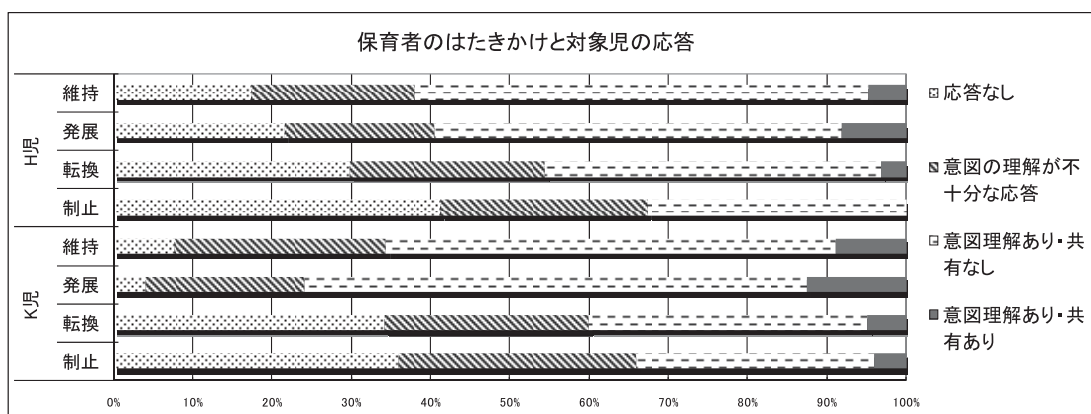
どうか調べたところ、両児ともに縦断的变化がみられなかった (H 児: $\chi^2(15)=19.868$ $p=n.s./$ K 児: $\chi^2(15)=21.041$ $p=n.s.$)。



ii) 保育者のはたらきかけに対する対象児の応答における差

保育者がどのようにはたらきかけるかによって対象児の応答に差がみられるかどうかについて検討した。その結果、両児ともに保育者がどのようにはたらきかけるかによって応答に差がみられた (H 児: $\chi^2(9)=16.670$ $p<.001$ / K 児: $\chi^2(9)=70.904$ $p<.001$)。残差分析の結果、保育者のはたらきかけが「維持」にカテゴリーされる場合

「応答なし」の生起頻度が低く ($p<.01$)、逆に「転換」と「制止」にカテゴリーされるのはたらきかけの場合「応答なし」の生起頻度が高い ($p<.01$) ことが明らかとなった。保育者のはたらきかけが「発展」にカテゴリーされる場合には「意図理解あり・共有なし」応答の生起頻度が有意に高いことが明らかとなった。さらに、「意図理解あり・共有あり」応答はどののはたらきかけにおいても生起頻度に差がみられなかった。



⑥考察

観察期間を通じて保育者との相互交渉における発達の変化はみられなかった。そのため、保育者が「どのようにはたらきかけるかによって対象児の応答が異なる」という結果は自閉症幼児とかかわる上での基本となるべきものであろう。障害を

持つ持たないにかかわらず、人間の発達にとって他者との相互交渉は常に発達の原動力である。しかしながら、ものに対する極限的興味を示す自閉症幼児と相互交渉を成立させることは容易なことではない。療育や保育の実践にとって自閉症幼児との関係性の確立させることは大きな課題である。

本研究から示された結果は自閉症幼児とかかわる上での保育者の基本的スタンスを明らかにできた

が、その上で保育実践上どのような工夫や課題があるのかを追求することが残された課題である。

介護福祉実践における「ホスピタリティ」の応用の可能性 その3 ～キャプション評価法から「ホスピタリティ」をとらえる～

田口 潤・関谷 栄子・土川 洋子

1. 研究の背景

一昨年度の介護福祉実践における「ホスピタリティ」の応用の可能性において、「ホスピタリティ」が介護福祉現場で応用できるのかについて検討した。その結果、一般的なサービスと福祉サービスにはサービスという概念自体に異なる点がいくつか見られた。しかし、対象者に快適に過ごしてもらいたい。と考え、他者として相手に関心を持つといった項目については共通している。「ホスピタリティ」を介護分野で応用していくことは可能であることが明らかになった。

昨年度の介護福祉実践における「ホスピタリティ」の応用の可能性その2において、学生の「ホスピタリティ」に対する捉え方について検討した。その結果、「ホスピタリティ」を「おもてなし」と捉えていた。また、「ホスピタリティ」について、実際にお客様に対しての対応として「笑顔や笑顔を絶やさずに仕事をする」ことや「目線を合わせて話す」そして「気づかい、目配り、心づかい、配慮」さらに、「優しい、思いやりの心を持つ」といったカテゴリーが必要な事であると考えていた。さらに、本来の「ホスピタリティ」の意味として、その場が「安心して満足して過ごせる」ということが大切であり、今後介護福祉士を目指していく中において利用者が過ごす場は安心して充足された気持ちで過ごせることを大切にしたいと感じていた事が明らかになった。

研究の展望としては、学生自身「ホスピタリティ」という概念がオリエンテーションゼミナールで捉えられた後、介護実践に活かせるよう具体化でき

ているのかは不明であった。介護現場での応用を考えた際、「ホスピタリティ」という概念を具体的にとらえるということは、すなわち学生自身の言葉で説明できるようになることが必要であると考えた。「ホスピタリティ」には「安全」「心くばり」「快適さ」の3つの要素があり、その要素について視覚的に捉え、言語化することがより「ホスピタリティ」を具体化することを可能にする方策として考えられる。また、介護現場において「ホスピタリティ」を捉える視点への一助となり得ると考えられる。

2. ホスピタリティとは

林田 [1]は、「心のこもったおもてなし」と定義している。また、鎌田 [2]は、「人を大切にする心」と定義づけている。さらに、欧米でホスピタリティを捉える際には3要素あり、「安全」「心くばり」「快適さ」[1]と定義している。

3. キャプション評価法とは

元来、都市景観評価のために1995年に開発された手法[4]である。視覚的に調査対象者が自身の評価を伝えることができる手法である。近年では、環境評価など子どもや高齢者など通常、評価に参加することが難しい世代の人が評価に参加できる手法として用いられている。

4. 研究の目的と意義

福祉援助学科で行われている、オリエンテーションゼミナールの中の東京ディズニーリゾート®で、